病める音楽 musiconfinée internationale

H13 Fg. 冨士延章

敢えて安直な比喩をするなら、マーラー交響曲第１番第3楽章のコントラバスのソロ（ソリ）を思い浮かべてほしい。悲しくデフォルメされたフレール・ジャックの旋律。あれを短い息で一小節弾き終えるごとにぷちっと切れる。息切れを起こして、忘れかけていた次の言葉を探す。どこか可笑しな葬送行進曲の幕開けである。その後に入るファゴットにはそういった難しい指定はない。粛々とppでどこまでもレガートにこじんまり、それでいてシュッとした感じで吹く、というのが定番で、そのために我々は毎回ありとあらゆる指使いを研究する羽目になる。

締め切り直前にアドリナリンを強制分泌させて突貫工事、というのは、小学校の読書感想文の頃から慣れっこになってしまっている。良くない癖だ。おまけに本稿に至っては締め切りをとっくに過ぎてしまっていて、編集委員の奥山さんにはただただ申し訳ない。しかし、だ。問題はアドリナリンすらなかなかやってきてくれないのだ。一週間以上続く熱、頭痛、乾いた咳、全滅した嗅覚、半減した味覚…

パリの自宅に帰宅したのは、先々週の金曜日。大学の毎年の恒例の行事となった修士の巡検旅行引率（写真１）。ボルドーから程遠くないピラ砂丘から７時間、だだっ広い大きなバンに3人学生を乗せてひたすら走った。本来９人乗れるところに４人しか乗車しなかったのは教務課独自の判断によるもので、この１メートル以上の距離とマスクで新型コロナウイルスの蔓延は防げる、とのことであった。まあ、本当にお粗末としか言いようがない。私は旅行前夜にだいぶ是非を問うたのだが、そんなのは後の祭り、帰宅してから延々と寝込むことしかできなくなった。

一緒の車に乗っていたお手伝いの博士学生が日曜日に嗅覚を喪失、巡検に行ったメンツは一週間自宅待機となった。その間私は食事以外寝てばかりで、話題の鼻に棒を突っ込むなんとも惨めな検査によって正式にコロナ陽性と判断された。気づけば耳くそは匂わないし、バナナはただ単純に砂糖しか感じられない。こうして症状の改善があまり認められないまま二週間目を迎えた。

そう、今は2020年。世界中が病める年。一日もあれば地球の裏側にでも簡単にいけたあの時代に、（少なくとも）大きな休止符を打った。このウイルスは様々な疑問を我々に投げかける。行き過ぎた環境破壊、共存し得ないと分かった人間の健康と経済活動。世界同時鎖国、世界同時ロックダウンによる新しい生活様式。テレワークの推奨に対する賛否両論。そんな中、おそらく世界中の人間が真剣に取り組み始めたテーマは、とてもエゴイスティックなのだろうけれども、己の生き方であり、現世の楽しみ方である。ここフランスではパリ離れが進む一方で、ディレクターと

呼ばれる、人に命令するだけで飯を食っていた者たちは、部下たちに混雑した地下鉄に乗って現場で仕事をしろと強要する。間違いなく今の社会は混乱していて、皆が皆なりふり構わず明日のおまんまのために生きている。私も含めた多くの人は、3月のマクロン大統領の「これは戦争だnous sommes en guerre」演説が後世に残る恥ずかしい言説だと感じているが、残念なことにあながち嘘でもなくなってしまっている。

フランスのコロナ対策はヨーロッパ諸外国に比べても後手後手にまわった。ロックダウンの一週間前まで誰もが中国やイタリアの惨状を対岸の火事と捉えていたし、私自身もエキストラで呼ばれたオケでシューマンのピアノ協奏曲第一番を呑気に吹いていた。唯一私の台湾人の博士学生にしてフルート吹きの頼思廷（ライ・スーチン）だけは、２月くらいから戦々恐々として研究所に出てくることすら拒んでいたので、相当おかしなことが起こっていることだけは把握していたつもりである。

気づいたらロックダウンで、気づいたらマクロンが言葉の通じないウイルスに向かって宣戦布告を行っていた。そんな戦場で音楽は置き去りにされていった。芸術はただのアクセサリーではない。ドイツでは文科相が早々と斯くなる立場を明らかにし、フリーランスの芸術家への経済援助を誓った。マクロン・フランスでそんな話があがるはずもなく、プロ・アマともに音楽家は突如ビデオカメラの前で楽器を一人演奏し始めた。私の悪友の一人にプロになりたてのSarah Niblackというアメリカ人ビオラ奏者がいるのだが、彼女は勇敢にも毎週火曜日正午きっかりに、全国中の一人ぼっちになった演奏家と共にバッハの無伴奏チェロ組曲を（ビオラで）ビデオの間で生演奏した。これはFrance musiqueのニュースにもなり、私も何かしなきゃ、という気になったのをよく覚えている。

フランス語でロックダウンに相当する言葉はconfinement（隔離）である。無論今年になるまでほとんど耳にすることのない単語であったが、オンライン飲み会などが始まった当時は、「Et votre confinement, comment ça se passe ? そっちの隔離生活はどうよ？」というのが決り文句になっていて、狭いパリのアパートで起こる面白体験、寝ても覚めても顔を合わすパートナーへの喜怒哀楽などを交換したものである。そこで私はその動詞confiner（閉じ込める）の過去分詞を使って、musiconfinée (=musique confinée : ロックダウン音楽、閉じ込められた音楽)と題して、ビデオ加工したアンサンブル動画を私のチャンネル(https://www.youtube.com/user/seismobassoon)で配信することにした。

最初はTotoのAfricaを一人十何役で吹いてみる、というものであったが、すぐに限界を感じた。テンポの維持というのがなんとも難しい。メトロノームから少しでも動かせば、例えそれが自分自身だとしても、ついていけない。私が遅まきながらこの

問題に気づいた頃には世界中のプロがボレロやショスタコーヴィチのジャズ組曲からのワルツやらに手を出していて、なるほど、プロでもテンポの動く曲は難しいのね、と合点がいった。

次に試したのは歌い振りビデオを先に取る方法である。これによってパリの音楽仲間とモーツァルトの木管8重奏（５人で実現）を試してみた。このビデオでは何度かの反復を繰り返した。この反復法は何を隠そう多重撮り重奏の（私の中での）パイオニア、11Fg原田元気さんに教えてもらったもので、いくつかのパートが出来てきたところで演奏すれば、音程とリズムが随分と取りやすくなるので、それを全パートで反復すれば有機的な演奏になる、という理論によるものだ。このビデオは、少なくとも身内では割と好評で、そうこうしていると東京から一通のメッセージが届いた。

「ふじさん、ぜひ私もこれやりたいです。ポルトガルメンツでドヴォルザークやりませんか？」

クラリネット吹きの中山佳子さんからだった。ポルトガルメンツというのは、僕と最狂悪友の14Ob山田英嗣くんが2008に企画した菅原眸先生指揮でリスボン遠征を果たした木管アンサンブルOrquestra de Câmara de Tóquio (OCT2008; よく考えたら何たるネーミング！) のことで、中山さんはもうひとりのクラリネット少女15Cl飛田藍さんが高校の可愛い後輩として連れてきてくれたのだ。東大メンツが多勢だったアンサンブルのなかで、飛田さんの高校時代のスパルタ先輩ぶりが見え隠れしたのはみんなの笑いを誘ってた、かもしれない。

「よっしゃ、よっちゃん、よろ！」

と返事したかどうかは覚えていないが、そこからドヴォルザークの管楽セレナーデmusiconfinéeプロジェクトが始動したのである。

当時ネット上にはとにかく似た感じのビデオが散乱していたこともあり、なにか今でしかできないことを探した。一緒に演奏できないことを嘆くのではなく、世界中ロックダウンという、おそらく人類史上はじまって以来の世界同時停止（世界各地の地震計データでも確認済み）を目の前にして、平時ではできないことを探した。私たちの結論は、「ポルトガルメンツで」10年前を「再現」することではなく、来年か何年後になるかわからないけど、「未来の」アンサンブルメンツで新しい音楽を作る、ということになった。

そうなれば話は早い。世界じゅうに散らばった音楽友達、プロもアマも混ぜちゃえばいいのだ…お互いは会ったこともないけれど、それはそのうち！１週間でビデオ

を完成させるため、既存の録音を使っての（一番ずるい？）録音アンサンブルになった。各演奏者に敬意を評して以下、東大オケ時代のパート紹介を思い出しながら、皆さんのちょっとした「他己紹介」でお茶を濁したい（写真２）。

Hautbois I Pauline Cambournac @ Nevers（ポリーヌ・カンブルナック@ヌヴェール）

彼女と初めて会ったのは3年前のと有るセミプロオケの「春の祭典」。こちらはコントラファゴットで参加。何分間も一人ffでFis-Eをメタルベースよろしく吹いている場面は常に周りの管楽器奏者の笑いのネタになってしまうのだが、彼女はとりわけ延々と爆笑していた。演奏会のあと飲み屋に流れ込み、まだ高校出たてでお酒に飲まれて、私にオーボエとコントラの二重奏を申し込み、夜中までありとあらゆるレパートリーを酔いどれデュエットで熱演してからというもの、何かに付けて私も彼女にオーボエのエキストラの仕事を頼むようになった。オーボエのせいか、しっかりしているように見えて抜けているところがかわいい。コロナ危機の前後で彼女はOrchestre français des jeunes 2020 (OFJ)という若手の登竜門とも言えるユースオケに見事首席奏者として合格した。これからの活躍がとても楽しみなので、サインは早めに貰っておきたい。

Hautbois II 山田英嗣@東京

もう悪友を20年続けている。東大現役時代からオーボエの坊っちゃんスターだったと記憶している。ポルトガルにも一緒に二度も行ったし、何故か私がパリに赴任したその年から2年間ご家族でパリにいたため、とにかく何だかんだとお世話になった。いつ会っても奥さんや子供がいても夜が更けるまで呑みあけてしまうので、危険な御仁である。私の30歳の誕生日には菅原先生夫妻とアリエージュくんだりまで来てくれた。経済学者だがキワモノに手を出そうとしていて、コロナ危機を機にキワモノ地震学者の私と共同研究しようとしているのだから、たちが悪い。

Clarinette I/II – 地図イラストレーション　中山佳子@東京

Musiconfinée internationaleの発案者。生まれながらの建築デザイナーと言う感じで、とにかくかっこいい。クラリネットを持って東京中のオケや室内楽を闊歩している。本企画では「全員白服を着て出演しましょう」と言うデザイナーならではの提案をするも、まさかの飛田先輩に裏切られてしまう。何かとオシャレなことはこのよっちゃんに聞きたくなる。

Clarinette II/I 飛田藍@San José

この方も悪友ランキングの最上位で、とにかく東京にいた最後の5年くらいは毎週末楽器もそこそこに美味しいものを食べ、美味しいものを呑んでは道楽の限りを尽くしていたグループの隊長格。何年か後輩になるはずだが、東大入学時からクラリネットの女王感があって、私はただただ彼女に師事していた、というのが実情だ。今や、サンホセでいいお母さんをしているようで、是非早く「ふじおじさん」を見せに行かねばならないと思っている。

Cor I Alexis Crouzil @ Genève (アレクシス・クルジル@ジュネーブ)

ホルン界の貴公子。リヨンの首席を経て現在スイス・ロマンドの首席を務める。私の「第二の故郷」ピレネーはアリエージュ県の誇る世界的スター。10年前はまだパリのコンセルバトワールに入りたてだったが、私が通い詰めるアリエージュの吹奏楽団ではその頃から彼といろんな協奏曲をやってきた（もともと子供の時からそこで吹いていた）。信じられない体力、跳躍力で何でもこなしてしまう。彼がまだOFJの2012年セッションでR. シュトラウスの薔薇の騎士とP. グラスの交響曲第十番（初演）を演奏したのを、山田英嗣くんやアリエージュの友人と当時のサル・プレイエルに聞きに行ったのは未だに記憶に新しい。「バラキシ」の官能的なソロに私はメロメロになって演奏会終了後そのことを真っ先に話に行ったら、なんと「なんだっけ？？そんなに俺いい感じで吹いてた？それにしてもフィリップ・グラス聞いた？ハイCisあんな何十連発も変拍子でできるとか、マジホルン冥利につきるわ」とケロッとした顔で返されてから、延々とそのグラスの難解なリズムを口ぐさんで酔い耽っていくクルジルを見ながら、天才は本当にわからない、と思ったものだ。この企画も二つ返事で受けてくれて、「今度あったとき一杯おごってねー」で済んでしまっている。

Cor II Jean-Noël Weller @ Paris (ジャン・ノエル・ヴェラー@パリ)

私の所属しているアマオケCOGEで数々の素敵なソロを披露してくれてから、ファンになっている。まだとても若い奏者で、元々はポリテク出身のバリバリインテリ理系だが、去年からホルンに本気を出してケベックやベルギーのユースなどで名を売り始めている。私は去年火星の地震計のデータを元にした交響詩（冨士2020）を作曲したが、ホルンのソロは彼用に書いた。途中にディジェリドゥーとのアドリブがあるが、私が思った以上の演奏をしてくれた。この秋には（私のコロナもあと2週間で治るだろうと計算すれば）一緒に英雄の生涯を吹けることになる、と思うと居ても立っても居られない。

Cor III Sébastien Rouch @ Foix（セバスチャン・ルッシュ@フォワ）

長らくアリエージュ県の吹奏楽団の総務をしていたとても気のいいフランス国鉄の運転手。クルジルにとっては、ホルンパートの親爺のような存在であるという。私も含め吹奏楽団のメンバーはトゥールーズとフォワ間の車が見つからない場合は、彼に電話をすれば、大概運転席に乗せてもらえて、一時間ゆっくり特等席で誰にでも少しは残っているはずの鉄道マニアの心を揺する。

Violoncelle Ariane Issartel @ Bretagne（アリアンヌ・イサルテル@ブルターニュ）

私の酔狂な企画にいつものってくれるノルマリアンヌ。比較文学の博士号までまっしぐらである。現在チェロの技術も然ることながら、彼女の芸術世界はいつでもとてもディープでなかなか心地よい。聴衆参加型の演劇もよく企画をしていてそれがとてつもなく面白い。音楽、言葉遊び、涙あり笑いあり。とてもウィットに利いているこの手のインテリ系の割に、排他的な匂いは全くしない。このビデオではブルターニュの3Gもやっとこさの家からガラケービデオで頑張ってくれた。

Contrebasse Ingrid Eskeland Wesenberg @ Brandu （イングリ・エスケラント・ヴェセンベルク@ブランドゥ）

今回唯一のノルウェー勢。彼女とは何年間かアリエージュ県のカタラン人（ため息）とノルウェー人のちびっ子音楽合宿のインストラクターとして一緒に仕事をした。今より環境意識が低かった私に、何だかんだと自然とゆっくり生きる感覚を教えてくれた。もう会わずに何年も経つが私のノルウェー語の先生である。オスロでプロの道を探していたが、なんといまはノルウェー国鉄で働いている。鉄道、音楽、ドヴォルザーク。なるほどなるほど。

Basson II Jean-Pierre Chevé @ Paris（ジェン・ピエール・シュヴェ@パリ）

パリのアマオケで長い間私の下吹きをしてくれている、元音楽の先生で元ジャズサックス奏者。私が彼に曲を書くときは必ずアルトサックス（Es管のため、ヘ音記号のファゴットと頭の整理がしやすいらしい）との持ち替えで書く。サックスを持たせたら危険で、どんなコードの並びを書いてもアドリブを完全に仕上げてしまう。フレンチバソンをドイツファゴットより優れていると信じて疑わない国粋主義者。私の大家さんだったり、ご近所さんだったり、とにかく私のパリ生活に頻出のおじ（い）ちゃん。

Contrebasson 江黒未希@東京

ある世代の東大木管のアイドル、江黒先生。いつも優しくアンサンブルを指導してくださり、そのファゴットは人柄が滲み出るよう。菅原先生が招致した2014年の国際ダブルリード東京大会では私と共に裏方仕事を戦い抜いた。今回は先生の「専門」

ではないコントラでの出演だったが、とても頼りがいのある音で、アンサンブルを包んでくれた。

Illustration graphique Alexia Schroeder @ Paris（アレクシア・シュレダー@パリ）

知る人ぞ知る私のパートナー。ロックダウンも大爆笑で乗り越え、本企画のイラストを担当してくれた（写真３）。今は二人共コロナポジティブながら、匂いと味が分からないご飯を「ここには生姜が入っててうんたら」と確認しながら楽しんでいるところ。どうもお後がよろしいようで。

ところで、ジャン・ノエルをホルン首席に据えて11月に英雄の生涯を予定している我がOrchestre de la Philharmonie du COGE (Cœurs et Orchestres des Grandes Écoles)であるが、私はコロナ感染の2週間前に音出し合奏には顔を出した–なんと言っても最後に出てくるちょろっとしたppのファゴットのソロは、もう随分と昔から吹きたくて仕方のない代物なのだ、なんとしてもコロナなんか退治して早くオケに戻りたい！！–のだが、練習再開のときの指揮者の言葉を今も噛みしめている。

「今回わかったように、音楽はとても弱い。まるで余興かなんかと思われて、『戦争』が始まればすぐに禁止されてしまう。でも今回わかったように、音楽がなければ生きていけない。それはプロでもアマでも演奏者でも聴衆でも変わらない。この本番ができるかどうかはわからないが、今だからこそ、好きな音楽をどんな形でもいいから助けよう。」

彼の名前はJordan Gudefin （ジョルダン・ギュドゥファン）。2017年ブザンソンのファイナリストで、私は道化師の朝の歌やショスタコーヴィチ交響曲第8番というファゴット吹きには垂涎モノ（だけど怖い！）のプログラムでお世話になった。それに私の「ピーターと地球」のユネスコ本部初演プロジェクトの指揮もしてもらった（冨士2020; 冨士・メシェデ2017）。コロナさえ終われば、ぜひ日本でも有名になってほしい指揮者である。

一小節毎の息継ぎをしながら、ようやく悲しきフレール・ジャックの旋律は終わりに近づいている。このmusiconfinée internationaleのビデオは、その後、南西フランスを代表する地方紙La Dépêcheの記事になった（写真４; La Dépêche 08/05/2020誰がリークしたのかはご想像におまかせする）。願わくば見知らぬ皆が一堂に会し、早くドヴォルザークの管楽セレナーデがアリエージュの険しい山にこだますことを願ってやまない。

2020年 10月6日

参考文献

N. Fuji (2020) Composition of the Symphonic poem SES, InSight No.1, PhiloGaïa Orchestra – from IPGP Orchestra to PhiloGaïa Orchestra, CIG newsletter. (https://geodynamics.org/cig/index.php?cID=1311)

N. Fuji & M. Meschede (2017) The PhiloGaïa Orchestra Projects: we love our planet! It lives, it sings!, The Double Reed, 40-2, 23-27.

La Dépêche du 8 mai 2020: VIDEO. Confinement : un concert virtuel international depuis l'Ariège

写真１：ピラ砂丘におけるハンマーによる人工地震実験の様子。小さな地震計アレイデータを解析して砂丘の内部構造を推定する。なかなかいいデータが取れてたんだけどな…

写真２：musiconfinée internationaleのメンバー。プロ・アマ入り乱れてオンラインで新しいアンサンブルを構築することに成功した。

写真3：musiconfinée internatoinaleのトップ画像。

写真４：La Dépêcheに掲載された記事。近い将来アリエージュに一堂に会することがあれば、新聞社から協賛を得ることができる、との口約束。

VIDEO. Confinement : un concert virtuel international depuis l'Ariège

Nobuaki s'est tourné vers ses amis Ariégeois pour trouver des camarades de jeu.

Musique, Ariège, Coronavirus - Covid 19

Publié le 08/05/2020 à 05:07 , mis à jour à 09:31

Un géophysicien japonais tombé amoureux de l'Ariège a une deuxième passion, la musique. Elle l'a conduit à proposer un concert virtuel à des musiciens du monde entier. Et bien sûr, des amis ariégeois sont de la partie. Les 12 virtuoses qui ont participé à ce projet pourraient bien se retrouver en Ariège l'année prochaine pour rejouer devant un public le morceau qu'ils ont enregistré sur YouTube.